

第二期 第七十三号

(初版)

(無料)

音信不通

本のビオトープ

2022. 08. 20

定有堂書店

発行

読書の四面体

闇の奥へ

返事をする日記

「別れ」にどんな本を贈りますか

汽水のほとりから (17)

大なる闇

『複雑化の教育論』をめぐる

人はなぜ歩くのか

いとしのコロツケ

胡瓜の翡翠 茄子の瑠璃

鳥取あれこれ その七十二

八代日記 (二十九)

夏至の明るひ宵の口に:

現実から逃れる場所へ

旅

マメイヌのいえ

奈良 敏行

ワクサカソウヘイ

鳥居 貴彦

岩田 直樹

小原 修治

萩原 俊郎

松田 裕史

芝野 浩貴

新井戸メロ

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

秦草 梅林

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

読書の四面体

奈良 敏行

(定有堂 店主)

近所で、新形態の食堂を営んでいる、Mさんに教わった、『料理の四面体』という本がある。新形態というのは、シェアという方法を取り入れ成功したという意味で、雑誌『Spectator』の「新しい食堂」という特集でも、巻頭に取り上げられている。この本は、料理をする人として生きることになったきっかけだ、とも聞いて気になった。

読んでみたら料理の文化人類学だった。ブリコラージュの手法で、身近なものを組み合わせていくことで、任意の素材いわば「逸脱」したものが、料理という形態、「規範」に高まっていくという内容の本だ。料理の神学だと思った。超越の頂点にあるのは「火」で、底辺に「油」「空気」「水」という、三点を結ぶ三角形がある。三角錐なのだ。つまり四面体となる。

「読書の四面体」というのは、どんな形になるのだろうと想像した。頂点に「本屋」、底辺の三角形三点に「本」

「人」「棚」と配置した。「本屋―本」の辺には「記憶の伝承」、「本屋―人」の辺には「本屋好き」、「本屋―棚」の辺には本屋の仕事という意味で「本屋の人間」と読み込んでみた。でもこれは単なる遊びで、それほど深い思索にもとづくものではない。ただの本屋感覚だ。

「読書の四面体」が料理の四面体と異なるのは、転がすことが可能だという点にある。四つの点(角)のいずれが頂点にきてもかまわない。料理の四面体の神は「火」だが、読書の四面体の中に神はいない。神は外部に存在する。

ひとつ倒して「人」を三角錐の頂点にしてみると、ここでの神は「実存」かもしれない。実存とは、人が人の境界を超えて人に思いを馳せるときの、荒涼とした体感だ。

実存とは死ぬという自分のありようから目を背けないでここにありつづける存在の仕方だ。この「実存」を描いたものとして、『スモールハウス』のことを、何度も語ってきた。インフラなどの定常世界を拒否して、孤絶した生き方と住まいを語る本だ。著者の哲学を知るのは、『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』を読むのがおすすだ。七年ほど前に書かれた本だ。その後どうしてるだろう?と気にしていたら最近『存在消滅』が刊行された。

「死とは、『永遠の無』である。永遠の無。私はこれが、

こわい。なにを考えていても、結局、ここに戻ってきてしまう」

と死の観念の恐怖を語り続ける本だ。人も宇宙もいつかは消滅する。「結果」から「動機」を組み立てようとするので土台が安定しない。そういう茫漠とした本だ。でもこのような、あらかじめ失われた動機からはじまる世界は、嫌いではない。とても引き寄せられる観念の世界だ。

ここから始まる生はシンプルなものとなる。始まる前から終わっているからだ。著者は自身の脳の中に住まっているようなものだという。ここという脳の支配というのは自己意識の強度をいうのだろう。フランス語で「頭」という意味合いで人物化された『テスト氏』という本を懐かしく思い出す。エピグラフに「デカルトの生活はもつとも単純なものである」と記される。自己意識と生活の簡素さは深いつながりの元にあるのだろうか。ブツキツシユという面ではその通りだ。本のことしか頭にない。現実世界に生活の占める処は最小なのだ。なぜそんな単純さへ追い込まれるのか。ヴァレリーは「苦痛は、苦痛を認識へ変えてしまえるような装置を求めていた」と言っていた。ここでは自己意識は自己救済の装置の座なのだ。

生活は簡単な方がいい。任意に生きる方がいい。実存

の気づきは「規範」から「逸脱」へと向かう。これはしかし「料理」の方向とは逆にたどるように思える。

こんな本をめぐる考え方は、とても偏っているに違いない。本を読むと知らないことが増えるばかりだ。「人ー本」という一辺を考えていたら、そんな実存の風景に出会ってしまった。わたしは「本」は読むが「料理」は作らない。食べるだけだ。

2022.07.17

玉村豊男 『料理の四面体』 中公文庫 2010

『Spectator』（新しい食堂）エディトリアル・デパートメント
2018

高村友也 『スモールハウス』 ちくま文庫 2018

高村友也 『僕はなぜ小屋で暮らすようになったか』 同文館

出版 2015

高村友也 『存在消滅』 青土社 2022

ヴァレリー 『テスト氏・未完の物語』 現代思潮新社 1967

定有堂教室「読む会」 （岩田直樹氏 選書）

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

闇の奥へ

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

今年の七月頭、私は感慨深きの極致に立った。

この数年、隔週のペースでなにかしらのライブやイベントを催すなどしている節操のない自分なのだが、そのどさくさに紛れてこのほど「ものすごく自分のためだけに」開いた案件があった。ミラクルパッションズの満了公演である。

なんのことかわからない人がほとんどであろうから説明すると、ミラクルパッションズとは私が十七歳の時から組んでいたコントのユニットである。結成日は二〇〇一年の九月十一日。同い年の仲間と高校の教室で「コントでもやろう」「じゃあ、世界で一番タサイ名前をユニットに付けよう」と盛り上がり、見事ミラクルパッションズは誕生した。学校から帰宅してTVを点けたら、世界貿易センタービルに飛行機が突っ込んでいた。

それから十五年間、ミラクルパッションズは半年に一回のペースでコントライブを打った。それは三人のユニットで、私が台本を書き、他の二人と一緒にそれを稽古で膨らませ、舞台の上で発表するのである。とにかく求めていたのは「無意味」で、一片たりとも「意味」のフレイバーなど残すものか、という気概でコントを作っていた。

初めの四年間くらいは笑いのメソッドなど感覚理解すらできておらず、なにをやっても全然ウケなかった。あまりにもスベっていたものだから、コンテンポラリーアートと勘違いされて、二〇〇五年の横浜トリエンナーレにパフォーマンスングアーツチームと呼ばれたほどだ。ちなみにこの時の打ち上げパーティーの席で、私は失礼をはたらき、オノ・ヨーコをめっちゃ怒らせたらしい。

だが、蓄積とは功を奏する。やがて私たちは「無意味」の取り扱い方についてのコツを得て、いままで静かだった客席を徐々に揺らせることができるようになった。つまり、ウケる技術を身に着けた、ということだ。回を重ねるごとにお客さんの数は増え、そしてミラクルパッションズはどんどん「無意味」の深度を追い求めるようになった。二十代中盤で文筆家としての活動も始めていた私であったが、その生業とはリンクしない位置で、私はコントを続けた。原稿テキストとは違う角度で生々しい闇を描くことので

きる「ミラクルパッションズ」のコントライブ」は、私にとつて実に大切なプロジェクトであつたのだ。闇とは、つまり「無意味」が作り出すマトリクスのことである。

しかし、闇だつていつかは満ちる。二〇一六年の一月に打った『我々は万博だ』という名のコントライブで、私たちは限界を悟つた。三人で、もうこれ以上作れる「無意味」など存在しない。この先もぶげ続けるといふことは、闇ではなく虚に落ちることに他ならない。それを理解し、私たちは活動を休止させた。そして、それぞれがその他の個のプロジェクトへと根を張ることを始めた。つまり、三人が「無意味」の下で顔を合わせることはなくなつたということだ。

そして二〇二二年の七月、つまりつい先日、ミラクルパッションズは六年半ぶりに集結し、満了公演『いでよ、ミラクルパッションズ』を執り行つた。色々とけじめをつけるための公演であり、そして三人でやる最後のコントライブでもあるわけだが、しかし解散ではない、満了だ。

たくさんのお客さんに来ていただき、そして私たちは満員の会場で、全身全霊をかけて「無意味」を出現させた。最後のコントで、これまでに一回も触ることのできなかつた闇の奥のそのまた奥に、指先が届いた気がした。それが、ミラクルパッションズの到達点だつた。コントライブ

を終えて家に帰つたら、TVは元総理が凶弾に撃たれた5-
というニュースで染まつていた。最初から最後まで、ミラクルパッションズは不穏な流れの中を生きていたんだな、と思つた。

都合十五年ほど、私たち三人はコントで闇を追い続けていた。金にもならないのに。それが狂気と呼ばれるものなのだとしたら、やつとこの七月に、ミラクルパッションズは狂気と折り合いをつけることができたのだと思う。そして、それぞれはそれぞれで、これからも闇の奥を求め続けるのだと思う。

闇と虚は違う。人には闇があつて当然で、本当に恐ろしいのは闇すら存在しない虚なる状態である。私は虚ろであることがなにより怖い。生きながらに死ぬこと、それを強く拒否し続けたいと願っている。

自分はこれからも、コントを作り続けることだろう。より深い、闇の奥に指を届かせるために。

返事をする日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

「きたよ」と近所のきよちゃんが言う。小学一年生。えー、と意味のない返事をする。「こないだ言ったじゃん」とちよつと怒られる。たしかに、三日くらい前に三日後にくるみたいなことを言っていた。小学生の約束なんてそんなもんだ。そんなもん、がかなり重要になる。それ以外ないから。あん時なんて言ってたっけ? ってメールをさかのぼって探したりできない。わざわざメモしたりしないからどこにも残っていない。

「そんなもん」なお客さんが増えてきた。「こんな本があつて:」と言いながら小さな画面を見せてくる。注文なのだろうか、取り寄せておけばいいのだろうか。次来たときに「あの本はいりました?」という。棚の目立たない場所に隠しておいた本を引っ張り出す。しばらく眺めてから「やっぱ買います」という。やっぱってなんや。ええ

けど。客注と店売のあいだ。

グーグルマップからメールが来る。「〇〇さんが開風社 待賢ブックセンターについてのクチコミを投稿しました」。なにも考えず迷惑メールフォルダに移す。移してから、やっぱ気になるのでクリックしてみる。案の定ロクなことは書いていない。「挨拶がありませんでした」とか。来店者が少ないので大体誰が書いたのかわかってしまう。ぐるっと店内を見て写真を撮り、本は一冊も手にとらずに帰っていったあなた。「セレクトショップとしてはパンチにかける」とか書く前に大きなリユックで入ってきて棚やら本にバシバシぶつけるの気をつけた方がいいですよと思う。一から五までの星で何かが決まっていく。へんなモノサシ。ここに書かれている言葉はいったい誰に対して書かれたものなのだろう。書いた人は満足しているのだろうか。せめて満足していてほしい。ほかになんの意味もないのだから。

「こんにちはー」と元気よく入ってきた女性が少し雑談をしたあとに「私こんなもの書いてます」と小さな冊子を取り出した。こういう時ついちよつと身構えてしまう。仕入れて下さい的な話が始まるのだろうか。でもそうじゃ

なかった。「読んでもらえたら」と言って差し出された冊子。もらってしまった。日記のような、エッセイのような、読書感想文のようなもの。書かれているのは一冊の本のまわりのごく個人的なことだ。差し出したその人の生活が自分の言葉で書いてある。面白かった。が、店でぼんやり座っていたら突然手渡されたという経験も含めての一冊だと思っただけ。一応値段もついている。ここで売れるかというところよくわからない。自分は買ってまで読むだろうか。書いた人のことを知っていたら読みたいと思うかもしれない。全然知らない人の話が書かれていたらどうだろう。文章よりも本よりも、人が先にある。個人的なものは個人的なままがいい、と思う。

Tさんが新しく店をオープンするという。二店舗目。本屋と展示と、少しの喫茶スペース。「ジンも扱います」と話していると横にいたAさんが「お酒も出すの?」と声を上げた。「いやJINじゃなくてZINEですね、」とTさんが訂正している。ZINEとは何かの説明は、もうすでに酔っ払っているAさんには届かない。数時間前までシャキッとした顔で会を取り仕切っていたはずなのに今はもう「それはジンだねえ」と何度も呟くだけのふにやふにやしたおじさんになってしまった。Tさんの説明は二週目に入ってい

る。隣で聞いていたぼくはどっちでもいいや、という気持ちになつていた。そこに売っているものが本であろうが酒であろうが、結局はそこにTさんがいるという事実には敵わない。浜比嘉島の隅っこで新しく店が開く。「できるかどうかはわからないけどやってみよう」とTさんはぼそつと言った。

隣のマンションの一室で内装工事が始まった。職人さんたちが前の道を行ったり来たりする。毎日あうのでなんとなく挨拶したりする。「前の出窓のやつ、なんですか?」と急に聞かれる。納豆の本作った人がいて、とむにやむにや言いながら飾つてある本を手渡す。「おもしろいなあ」と言いながらページをめくり、「ぼく納豆きらいなんですよねえ」と笑う。地獄ですね、と言いながら返ってきた本を受け取る。

「別れ」にどんな本を贈りますか

岩田 直樹

(公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」選書人)

少し前の話になるが、三月末日をもって定年退職した際、かつての同僚も含めて多くの方々から餞別をいただいた。先日、思い出に残る品を眺めて感慨にふけっていると(中には勤務校の卒業生が描いた小さな絵もある)、少し落着いたら読もうと本棚の前面に立てかけていた本が目に入った。

メモが挟んである。「別れの季節になると思い出す文章です」と。付箋がついている「ことしの別れ」(幸田文『季節のかたみ』講談社文庫、一九九六年、所収)という八頁の短いエッセイを読む。要約するのは野暮だから、心を動かされた箇所を引用してみることにする。

「長く身近にいてくれた娘さんが、先頃これも新しいくらしに向けて、出発していった。別れに先立って、なにをはなむけにしようか、と考えたあげく、別れの心づかいといえは大袈裟だが、若干の、去るに当たっての方法のようなことを話しておくのがよからう、と思った。はき古しのサ

ンダル、使いかけの化粧水、書き反故、空箱など一切残さぬこと、それらを始末する時、がさつにせかせかせしないで、しっとり落着いた気持ちにと心掛け、一つ一つに、ここが区切りなのだ、ここで一段落おわるのだ、と思いい片付けてみて頂戴、こう教えるのが私の、あなたへの世話やきのおしまい、そう片付けるのがあなたの、ここでの生活のしめくりだ、といった。」

その娘さんは言われたとおりにした。「もしこれに注意されなかったとしたら、どんなに恥かしいお別れのしようをしたかと思う、……とうるんだ目をあげて、礼をいつてくれた。」別れの日、彼女を玄関で見送ったあと、「なつかしさあふれて、私は彼女をおもい、そしてまた、今年の終わりはいい終わりだった、と思った。」

「ことしの別れ」を読みながら、なぜか、全作品を通じて「seed わびしい」日常生活の営みの中に実存する人間たちの世界を描いたグレアム・グリーン短編を思い起こしていた。

『無邪気 The Innocent』(『グレアム・グリーン全集・第一三巻 二一の短編』早川書房、一九八二年、所収)は僅か六頁の小説である。

「ローラなんかつれて来なければよかったと、小さな田舎駅で汽車から降りた瞬間に」そう思った「私」は、人

生の最初の一二年間を過ごした小さな街を、昨晩バーで偶然に知り合ったローラとあてもなく歩く。

七歳のときのことを思い出す。一緒にダンス教室に通っていた一つ上の少女に、強い愛情を抱いていたことを。彼女と別れが近づいたとき、随分と頭をしぼって紙片に何かを書いて、門の穴の中にそっと入れたことを思い出した。指で探ってみた。紙片は残っていた。「マツチの小さな焰の光で露骨な猥画を見た時、私はハッと驚いた。……私はその絵を描いた記憶がなかった。それはまるで、どこかの卑猥な男が便所の壁に書いた落書きみたいに思われた。私の記憶に残っていたものは、その時の愛情の純粹さと、烈しさと、そして苦しみだけであった。」

初めはなんだか裏切られたような気がした「私」は、その晩ローラが寝込んでしまってから、「あの絵の深い無邪気さがわかりはじめたのだった。私は、あの絵をかきながら、独特の美しい意味をもったある物をえがいているのだ」と信じていたのだった。あの絵が猥せつなものに思えたのは、三十年の歲月がたつて、心がすっかりけがれてしまつたからにすぎなかった。」

別れに贈る本としては、「あなたに降り立つ駅は存在しますか。無邪気を失っていませんか」と問う『無邪気』は、デープすぎる。ここは太宰治かな、と思いつく。

彼の作品群の中で、陰影を帯びつつも未来に希望を抱かせる「明るき」によって特異な位置を占める『津軽』（新潮文庫、一九五二）は、一九四四年に小山書店の依頼で津軽風土記を書くために故郷を旅した記録である。

数年に一度は『津軽』を手取るから、もう一〇回は読み返しただろう。三歳の津島修治を六年間育ててくれた越野たけとの津軽半島西岸・小泊での三〇年ぶりの再会場面（クライマックス・シーン）は、いつ読んでも涙なしではいられない。

何もしやべらない「たけ」のそばで運動会を見る修治は、そのとき「生まれてはじめて心の平和」「不思議な安堵感」を覚える。

末尾の文章がまたいい。「津軽の生きている雰囲気は、以上でだいたい語り尽くしたようにも思える。私は虚飾を行わなかった。読者をだましはしなかった。さらば読者よ、命あればまた他日。元気で行こう。絶望するな。では、失敬。」

「今、このとき」を生きる私たちには、どのような人生が待ち受けているか見当がつかない。修治の心の底からの別れの言葉「元気で行こう、絶望するな」はとても粹である。その後の太宰治を考えると若干の躊躇はあるが、やはり私の推し本は『津軽』で決まりだ。

汽水のほとりから (17)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

「拡大自殺」という言葉があるそうである。90年代に英仏圏で使われ始めた概念の翻訳語だそうだが、日本でも令和に入ってから急増していると言われる。明確な定義は無いようだが、分かりやすく言えば、世の中に背を向けた個人が一人で死ぬことを嫌い、他人を道連れにする現象を指す。単独犯による無差別殺人になることが多く、しかも犯人は直後に自殺してしまうので、そう呼ばれるらしい。令和元年に起きた川崎市登戸通り魔事件や、昨年の北新地ビル放火殺人事件が典型的な「拡大自殺」の事例である。

つい先日、仙台市内で登校中の女子中学生2名が突然刃物を持った見ず知らずの男性に襲われ、重軽傷を負うという事件があった。逮捕された男は「人を殺して刑務所に入りたかった」と述べたそうだ。犯人は自殺していないが、この事件もまた「拡大自殺」の一種と考えられるだろう。

「刑務所に入りたい」というのは、社会に居場所が無いという意味であり、「死にたい」とほぼ同義だからである。

「拡大自殺」の犯人は、何らかの理由で現在の自分の境遇に言い知れぬ絶望感を抱いており、それは衝動的に自分の内へ向かうと共に、自分の外にある社会へと向かうのだ。

その意味では、この事件の翌日に起きた安部晋三元首相銃撃事件もまた、「拡大自殺」に通じる点が多いようだ。確かに、この事件では標的を絞っており、無差別殺人ではない。しかし、当初は爆弾を使うことも考えていたようであり、一歩間違えば無差別殺人になった可能性は十分にあった。何よりも犯人は過去に自殺未遂をし、現在は無職のままで社会的に孤立し、もはやこうした犯罪を企てることにしか生きる意味を見出せないように、逮捕されることを前提に犯行に及んでいる。これは政治的なテロや暗殺ではない。

警視庁の「自殺統計」によれば、昨年度の国内の自殺者は二万人余りで、20年前より約一万人減少しているが、それでも毎日六十人近くが命を落としている計算になる。自殺未遂者はその十倍はいるとされ、自殺を図る人の総数は毎日六百人以上上ると推定されている。これは尋常な数ではない。今さら言うまでもなく、我が国は世界有数の自殺大国なのである。厚生労働省の自殺対策のHPには、「自殺はその多くは追い込まれた末の死であり、その多

くが防ぐことができる社会的な問題です」とあるが、まさに「拡大自殺」の犯人もまた、「追い込まれた末」に社会に絶望し、やむにやまらず凶行に走った人たちではないか。

「拡大自殺」の犯人に潜む心の闇は精神分析や心理学の専門家によって論じられることが多いが、これが社会的な問題である以上、それはまた社会学者の仕事でもあろう。そう考えて思い当たるのは、今年四月84歳で亡くなった見田宗介である。今からほぼ半世紀前の一九七三年、彼は数年前に世間を震撼させた連続射殺事件の犯人永山則夫を扱った論文を発表している。その論文「まなざしの地獄」は、二〇〇八年に河出書房新社から同タイトルで単行本化されたが、それは同年六月に起きた秋葉原無差別殺傷事件の衝撃を受けてのものだ。これもまた「拡大自殺」の一種というべきこの事件の犯人を、見田の弟子の大澤真幸は、巻末の解説の中で連続射殺犯の永山則夫に比定している。

見田は永山をこう評する。「N・N（*永山則夫のこと）のばあい、その犯罪を個々に孤立してとりあげてみれば、それぞれ「防衛的」なもの、あるいは「必要に迫られて」のものとして解釈することも可能であった。けれどもこのようにたやすく、かくも非情に過剰防衛に訴えることは、そのいわば潜在する動機的地層に、〈他者たち〉への一般化された憎悪・怨恨・怒りの存在することを思わせる」と。

著者によれば、「まなざしの地獄」とは、現代社会の構造に内在する原罪性である。どうすればこれを脱せるのか。

この論文の2年前、見田は永山が獄中で完成させた処女作『無知の涙』の書評をこう結んでいる。「つまり本書は、社会によってまともな生き方を奪われた一人の少年の、『この社会』にたいする報復のための〈第六の事件〉なのである。ただし、この第六の事件はもはや、第一―第五の事件のように、ピストルをもってやみくもに罪もない隣人の頭蓋をぶちぬく犯罪ではなく、「知」を武器とした現今の秩序への反乱である。だから本書は、（悔い改めた死刑囚の美しい物語の類とは異なつて）「危険な書」であることをはっきりと言わねばならない。しかしこの「危険」を社会が黙殺し去ろうとすると、第二、第三の永山は必ず生まれる。本書の毒は、われわれの生きる社会の毒に他ならないのであるから」（『見田宗介著作集』岩波書店）。

見田はこれを書いた前後から真木悠介のペンネームを使い始める。代表作『気流が鳴る音』（ちくま学芸文庫）の刊行は、その数年後だ。思うにそれは永山の「知」を武器とした現今の秩序への反乱」に応じた結果であった。

大いなる闇

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

その男、Tはまだ若く、すらっとした長身で、笑顔を絶やさないう美男子だった。

今から三十二年前、平成2年。彼は翌年春に予定されている鳥取県議選の倉吉市選挙区に立候補するため、ふるさとに突然帰って来た。

前歴は元代議士秘書。当時はまだ中選挙区制(一つの選挙区から複数当選できる)で、有名女優と結婚し、彼女の故郷を地盤に当選を重ねていた自民党のA代議士(故人)は、倉吉市内にも強い支持基盤を誇っていた。T自身も地元の進学校では陸上選手として活躍し、東京大学に進学した文武両道の秀才。まったく非の打ちどころがなかった。「これはもう当確だな」。取材記者として思った。

◇ ◇ ◇
ところが立候補を表明して数週間後、東京から週刊誌の囑託記者を名乗る男たちが2人、新聞社の支社を訪ねて来た。聞けば「Tは東大時代、靈感商法などで問題となっている原理研(統一教会の大学組織)で活動。その彼が県議選に出ると聞いて取材に来た」という。

当時、「あなたが不幸なのは悪い霊が付いているからだ。これを買えば救われる」と強引に壺や数珠を高値で買わせる靈感商法が社会問題化していた。勝共連合、統一教会、原理研……さまざまな顔と名前を持つ。キリスト教とは名ばかりで、一週間缶詰にされて「洗脳」され、家に帰ってこない息子や娘たちを取り戻す親たちの運動も報道され、ようやく世間もこの得体の知れないカルト宗教に注目し始めていた。

週刊誌の記者たちはしばらく市内をあちこち取材して帰っていったが、「それにしても、A代議士ともあろうものが、そんな男を秘書にするだろうか」。正直、半信半疑だった。

◇ ◇ ◇
しばらくして週刊誌にTの記事が載った。それを読んで、地元で彼を応援していた支持者らが「信じたくはないが、あんたは本当にそんなこと(靈感商法)をしていたのか?」

と問いました、という話が耳に入ってきた。

結局、当初の勢いこそ削がれたが、翌年4月の県議選倉吉市選挙区(定員3人)でTは6088票を得て2位で当選。任期中も統一教会との関係はうやむやのままだったが、それは暗い影のようにつつと彼に付きまとい、4年後の県議選は、通常なら2期目は強いはずなのに5051票で次点に泣いた。

Tは再選を目指すことなく、いつの間にか倉吉からいなくなつた。彼のことを覚えている市民はもうわずかだろう。同窓生らの話では東京で自営業をしているとのことだった。



統一教会への献金で家庭が崩壊した男が安倍元首相を銃で殺害した事件で、にわかに統一教会(現在は世界平和統一家庭連合に改称)が注目を浴びている。といってもこのカルト宗教はずつとおとなしくしていたわけではなく、ただ世間やマスコミの方が忘れていただけなのだが。

いや、「忘れていた」というより、事件後、外国メディアは「統一教会」とすぐ報道したのに、どこのテレビ局も新聞も「ある宗教団体」としか報道せず、教会側が先手を打って「釈明会見」を開くまでずつと名を伏せていたところを見ると、「目をふさいでいた」というのが正解かも知れない。

かつて靈感商法の報道でおなじみだった被害者の会の弁護士らが、久々にテレビに登場した。靈感商法や集団結婚式で有名な統一教会だが、今回、弁護士らは政界との癒着を次々語った。マスコミが「目をふさいでいた」理由はそれかも知れない。運動員や秘書の派遣、資金支援…。関係する自民党や一部野党の現職国会議員、大臣経験者、地方自治体の首長は悠に百人を超えた。

Tのような事例は、ずつと昔から、そして今も当たり前に行われていたのである。



日本人から搾り取った金が一体どれくらい韓国の教会本部に流れ込んだのか。保守派やネトウヨの方々は「韓国嫌い」が多いが、韓国のカルト宗教と持ちつ持たれつ、ズブズブの関係を築いてきた自民党にこそ、目をむいて怒るべきではないのか。自殺した国交省職員の子供による裁判がまだ続く森友学園問題、うやむやにされた加計学園問題。防衛省の日報隠蔽や、説明がないままの桜を観る会、これに「政界とカルト宗教との癒着」という新たな闇まで加わった。これじゃとても国家的葬礼行事―「国葬」で見送るような気にはなれませんよ、というのが正直な気持ちである。

『複雑化の教育論』をめぐる

松田 裕史

(高校教員)

内田樹の『複雑化の教育論』は、二〇〇八年に出版された『街場の教育論』の続編とも言える。(『街場の文体論』も言語教育の視点から読んでもすくぶる有益だった。)明日からすぐに役立つハウツー的なことは何も書いてないが、数多ある「」やアクティブラーニング系のハウツー本よりはよほど読む価値がある。まず、学校という場を内田は次のように定義する。

学校は子どもたちの成熟を支援する場です。それに尽くされる。

そして、成熟とは何かといえば、複雑化することである。量的に何かが増えるのではなく質的に子どもが変化すること、これを支援することが学校の使命だという。複雑化を教員が見取することはそれほど容易ではないし、子どもがそ

れを言語化するのはさらに難しい。自信をもって声高に自らの変化を叫ぶことなど期待してはいけない。それは、聞き取れないほどの微かな声音のことであろう。

一方、学校外の社会でも、教育現場でもいつの間にか分りやすいや単純主義が幅を利かせる場面が多くなっている。内田は次のように言う。

すべてを二項対立スキームに流し込んで、一刀両断する「スマート」な知性が過大評価される一方で、世の中は複雑であるということ認めて、その複雑な絡み合いを一つ一つ根気よくほぐしてゆこうとする忍耐強い知性には誰も見向きもしなくなった。

この一つの現れとしては、学校現場でもディベートを活動として取り入れることが増えたことだろう。ディベートを通して、子どもの価値観や世界観が更新され、多様な思考や意見に寛容になることができるが、ほとんどのディベート活動は僕が見る限りそうはなっていない。表面的によくある意見を言わせて、ジャッジに勝敗を委ねる。反論に対する反駁はまともなものになっていない。まさに活動あつてほぼ学びなしの状態になっている。盲目的にディベート礼賛する教員を見ると、正一反合はどこへ行った

のか、アウフヘーベンはどこへ行ったのか聞きたくなる。それよりは、結論をいい意味で先延ばしするデイスカッションの方がよほど意義があるし、ドミニク・チェンが『未来をつくる言葉』で再発見した、思考を互いに接ぎ穂していく「共話」の方が教育的だ。単純主義、二項対立：ロシアの言語哲学者であるバフチンが唱えた「ポリフォニー」と対極にある言語状況。学校こそ、多声的言語が飛び交う場所であるべきであろう。それに対し、『街場の教育論』でも言われたことが再び『複雑化の教育論』でも引き合いに出されている。

教育というのは、有用な知識や技術を効率よく子どもに伝えて、獲得された知識や技術を数値的に表示して、その点数に基づいて子どもたちを格付けするためのシステムだと信じている人が現代日本ではほとんどです。

「伝える」ことしか頭にない教員は、自身がおそらくそのような指導を受けてきたのだろう。佐藤学は「聴く」とこそが教員の第一義の仕事だという。内田は聴くことについて臨床医の例を出している。

臨床医は患者の訴えを黙って聴く。とりあえず受け入れ

る。そして、このような発言はどのような文脈から生じてきたのか、それを考察する。

分かりやすいものだけを与え続け、子どもにも分かりやすさを求める。複雑になることは分かりにくくなることであるから、必然、単一のアイデンティティを求めるきらいが出てくる。ダイバーシティ（多様性）は社会の表面の見えるところだけに存在するのではなく、一人の個人の中にもあるはず。確固として揺るがないアイデンティティこそ机上の空論、絵に描いた餅にしか思えない。それよりは、「自分のなかにさまざまな異物を取り込んでいて、そのどれもが排除されることなく、折り合っている状態」を「同期が達成している」と内田は説く。この一年でよく耳にするようになったオンライン授業、デジタル教科書、Google For Education、観点別評価……これらは子どもにとって有益な異物になっていくだろうか。「まだ知らない世界」「おもいがけない冒険に」なっているだろうか。

子どもたちが求めているのは、「まだ知らない世界」にはいることだからです。思いがけない冒険に巻き込まれることだからです。

人はなぜ歩くのか　くさようなら岩波ホール

芝野 浩貴　（地球探家）

ジョン・ミューア・トレイルを歩く日が来るのだろうか。2022年は「生産緑地問題」が顕在化してくる年である。土地とは誰のもので、人が住むとはどういうことか。△共有地▽や△シェアすること▽についても再考され始めている。

人生で大事なことは映画から学んだ。

都営新宿線、半蔵門線の開通を見据えて1968年、神保町に多目的ホールとして岩波ホールは開館した。その数年後の1974年に「エキブ・ド・シネマ（映画仲間）」活動の一環として、日本初のミニシアターの役割を担うこととなる。

陰陽五行説では、木が火となり土となり金となり水となる。最初の上映作品はオプー3部作の「大地のうた、大河のうた、大樹のうた」（ベングルのサタジット・レイ監督作）であった。中山道を歩いていた時、碓氷峠でタゴールの碑（軽井沢来日記念）に遭遇した。県境に建つこの碑は、ベングルを愛し、インドとバングラデシュの分断を憂いたタゴール精神の意味をも暗示する。岩波ホールでは、「詩聖タゴール」として1976年に上映されている。

岩波ホールの主な上映方針として

「①人間はいかに生きるべきかなどのテーマについて考えさせるものを

ピックアップする

②商業主義とは一線を画し、企業コミュニケーションを流さない

③なるべく欧米から離れたアジア・アフリカ・南米の映画を誘致する」がある。非西欧圏で初のノーベル文学賞受賞したタゴールのことが上映されたのは象徴的であるが、タゴールがノーベル文学賞で得た賞金を地元の学園経営に充てたことが私の心には響く。最近では南米ウルグアイのホセムヒカにも感じたことだ。「異邦人」（1981年）、「ハンナ・アーレント」（2013年）、「マルクス・エンゲルス」（2017年）などでは、本から得た知識やイメージと比較して観た。イマジネーションとインフォメーションを交錯させるのも映画鑑賞の醍醐味。ちなみに、タゴールへのオマージュとして、日本人の佐々木美佳さんは、「タゴール・ソングス」という映画を製作し、本も出版している。「荘厳・熱情・気高さ」を併せ持つ詩や歌を作り続けた生命の営みに触れるために。

アメリカ映画だが「八月の鯨」（1987年）は上映されロングランとなった。老いの日常をテーマにハリウッドの勧善懲悪やヒーロー性に抗したものであり、今こそ通用する普遍的な映像となっている。あるがままといえば、「ゴルチャック先生」（ポーランド、1990年）では、「子どもは権利・死・今日という日」を考えさせられた。諦念の中でも、よりよい生き方を模索する。戦争が絶えない今も響く静かな反抗である。戦時下のサラエボで撮られた「パーフェクト・サークル」（1997年）では、「3人目になるな」という台詞が印象的である。国境を渡るとき

に、先頭が見つかれば、2人目が狙われ、撃たれるのが3人目となるので注意しろという臨場感ある戒めの言葉だった。国境とは何のためにあるのか？

「人間は文章で書かれるように思考するのか」

についての問いに私は否と答えるが、△意識の流れ△をテーマに書かれた「ダロウェイ夫人」を映像化したものも1997年に上映された。中国映画について、ただ配達するだけでない郵便の仕事を描いた「山の郵便配達」(原題はあの山・あの犬、1999年)や、胡同の理髪師(2006年)において、今の言葉でいうエッセンシャルワーカーを感じた。民族の伝統と人権(母たちの村・セネガル・2004)、中東情勢と国境(シリアの花嫁・イスラエル・2004年)、イスラム因習と女性解放運動(少女は自転車に乗って・サウジアラビア・2012年など)について日本にいながら考えることができたのも、岩波ホールの上映理念の恩恵であった。

フランス映画の「パリ、20区僕たちのクラス」(2009年)が上映されたのは、出演している生徒24名が全員移民で、後に日本にも伝わるLGBTQの問題も含めて、「差別と教育」というテーマがグローバルな問題だからだろう。私が観る映画のテーマは教育関係が多くなるが、「草ぶきの学校」(1999年、中国)、「ローマの教室で」(2012年、イタリア)、「12ヶ月の未来図」(2017年、フランス)、「ブータン山の教室」

(2010年、ブータン)など「私ならその場で何が伝えられるか？」という当事者意識をもって鑑賞した。学校の機能不全に対して行政として何ができるのか？税金は何に使うべきか？をはっきり伝えてくれた「ニューヨーク公立図書館」(2017年、音信不通40号で言及済)も忘れがたい。

そして、岩波ホール最後の上映作品は「歩いて見た世界ブルース・チャトウィンの足跡」であった。チャトウィンのことを深く知らなかったので、鑑賞後に彼の代表作の「パタゴニア」を読んでみた。風景が先か歌が先か。ソングライン。土地は歌で歌われる。パタゴニアのウシュアリアを訪れたことはあり、世界最南端の鉄道は見たことはあるが、ずっと歩ける風土ではない。ヤガン語でウェイナは「揺れる 移動する さまよう」という意味らしい。イヤヤ(ひらひらした海草につなぐ)、オーカーン(水にたゆたうカヌーで眠る)、ウコーモナ(魚の群れにモリを投げる)などの動詞が生活環境を語る。

神保町ずらん通り(電車道跡)を歩いても、三省堂もキッチン南海も存在しない。その突き当たりにあった岩波ブックセンターだけでなく、岩波ホールも消えた。(2022.7.29)

書泉グランデと明倫館の狭間で一旦立ち止まり、また歩き続けるしかない。私が世界考察する時の学舎であった岩波ホール。ありがとうーそして、さようなら！

いとこの「コロッケ」

蟹の日々（二）

新居戸メモ

（ドッベルゲンガー）

最後の晩餐に何を食べたいかと聞かれたら、ためらわず「母のコロッケ」と答える。帰省のたびにリクエストするわたしに、「何でコロッケなんて。もっとご馳走を作るのに」と母は言う。でも、わたしはあのコロッケがいい。

揚げたての衣はさくさく、実家の畑で採れたジャガイモはほくほく。挽肉は控えめで、素材の味を生かすように味付けも薄め。これは父のためで、彼には何かタレをかける食べ物には、すべてウスターソースをびたびたにかけずにはいられないという呪いがかかっている。この味に慣れると、店で買うコロッケは味付けが濃くて食べられなくなってしまう。

半年前の年末年始に帰省をした。その年の盆は帰省を見送っていたので、二年ぶりのことだった。これはコロナウイルスの感染が拡大している状況を考えて県外への往来を差し控えたということもあったし、また自分自身術後まも

なくて、薄着の季節に普段通り振る舞うのは難しいだろうと思ったからだ。要するにボロが出ることを怖れたのだ。

この表現でわかるとおり、自分の病気について実家の人々には何も伝えなかった。つまり、告知から入院・手術を経て退院した現在に至るまで、がんであることを隠し通す方を選んだ。理由はあれこれある。わたしがもつと若く両親も現役世代であれば、両親とわたしの心情面の距離がもつと近ければ、肉親の立ち会いがどうしても必要だと言われれば、気が進まないことには変わりはないが、あるいは告白せねばならなかったかもしれない。しかし医療の現場もコロナ禍で大きく変化しており、隠し通したいわたしにとって都合なことに、告知から退院まで立ち会いも付き添いもすべて不要で、ひとりで入院してひとりで退院できた。医師の説明も遠方に住む姉がオンラインで同席（？）することで済ませられ、お近未来の医療風景がここに！と感心したものだ。

そんなわけで、二年ぶりに帰省したわたしは、臓器が減ったり代わりに傷が増えたりしていたものの、素知らぬふりで家族団欒に混ざって過ごした。それは久しぶりの賑やかな時間だった。虫愛する姪っ子は育てているイモムシのかわいらしさについて延々話し、穏やかな義兄は辛抱強く相槌を打つ。白髪が増えた父はお氣に入りのマッサージチェ

アに寝転んで、なついてくる猫を相変わず無造作にあしらう。母はうきうきしながら忙しく立ち働き、わたし達姉妹はそれを代わるがわる手伝う。数年ぶりの家族集合に上機嫌の母は、実家から足が遠のきがちな娘（わたしのことだ）のために、お節料理に加えてコロツケまで作ってくれて、それを心ゆくまで食べた。今思えば、三世代が元気に集い、揃って過ごした貴重な時間だったのだ。貴重でおそらくは最後の。

母が脳卒中で倒れたのは、年明けからまもない寒い日のことだった。最初に知らせを聞いてもちろん驚き動揺したが、同時に「ああ、よかった」という思いが湧きあがり、その感情の強さに自分自身打たれたような心地がした。年末に帰って、元気な姿を見せておいてよかった。現在はまた感染が拡大し、県外への往来が難しくなってきた。まさにぎりぎりのタイミングだった。そして、がんのことを言わないでおいてよかった。何も娘ががんであるなんて告げて、余計な心配事を増やさなくてもいいではないか。よかったのだ、これで。そして、もう打ち明けるという選択肢は金輪際なくなつた。このまま、墓の下まで持つていくのだ。

冬から春にかけて数カ月入院生活を経て自宅へ戻った

母だが、処置が遅れたこともあり後遺症が残った。脳と心臓は実に精密にできていて、一部が損傷すると運動機能以外にも様々な働きに影響を及ぼすらしい。物が二重に見える。片側にあるものを認識できない。何かをしようとすると、それを遂行できない。洗濯物を干そうとしながら、形が違うものをうまく干せないと立ち尽くす母。なんとか包丁を持った方がいいが、切り方がわからないと途方に暮れたように呟く母。わからなくなってしまうたなら、いっそ綺麗さっぱり認識さえできなくなればいいのに、「自分がわからないこと」は自覚できてしまうから辛いだろう。「もう何もできなくなっちゃった。ごめんね」と母は謝る。……何も謝る必要などないというのに。元々細かった母の肩は、随分肉が落ちて一回り痩せた。

コロツケは手間のかかる料理だ。あのふつくらこんがりした完成形にたどり着くまでにいくつもの行程があり、それが面倒でわたしは自分のためには作らない。材料を切り茹でて、タネを作る。成形して小麦粉をまぶし、溶き卵を絡めて揚げる。今の母にとっては複雑きわまりない作業の末にできあがる、あの味。

もう口にするのではないだろうあの黄金色を、慕わしく思い出す。

胡瓜の翡翠 茄子の瑠璃

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

世に清涼文学とか涼風文芸なるものが存するや否や、寡聞にして知らず。さりながら、涼味を誘う小説、随筆などは少なからず在る。

「去年もこうだったが、今年は殊の外、雨が降らず池も川も干上がってしまった。流石に風はあるものの、これが熱風で、どこへ逃げて涼める場所がない。」（意訳）と書いたのは建部綾足。明和八（一七七二）年六月五日のことである。

二百五十年前も、日本の夏は暑かった。旧暦六月五日だから、現在の七月半ば頃。丁度、今時分である。

とても寝ていられなくなった綾足、もぞもぞと起き出して、文机に向かった。全国各地を旅行した昔を思い出し

つ、涼し気な風物を書き出してみれば、少しは気散じになるだろう。そんな心持ちで綴ったのが『すずみぐさ』。

「武蔵の国、秩父といふ山間に、赤岩といふ所あり。（略）凝々しき巖根をめぐりくる水の音、先清し。（略）松柏おひふたがりたれば、日のかげさらにもらず。朝にけに吹風はたゞ葉月ばかりの音せり。もたる扇もはなちおけば、まして蚊帳引はらむ夜すらもなし。」

夏野菜を「胡瓜の翡翠、茄子の瑠璃」と表現したのは鏑木清方である。

「真つ青な胡瓜は（略）沼から掬って来たように、輪切にすれば坂東の定紋三つ大に似たのを、噛めば水気日盛りの渴を止め、揉んで小鰯の新しいのと酢の物に、穂紫蘇を添ゆれば夏の風味これに過ぎたるはない。」（「紫陽花舎随筆」）「紺瑠璃色の茄子の艶と、翡翠の緑滴る胡瓜とは、片影をつくる葭簀をもれて、八百屋の店頭にピカソの陶画にでもあるような、新鮮な魅力を放つ。」（同書）

清方は、涼を呼ぶものとして、簀戸、寺院の樹陰、伽藍の広間、削氷（かき氷）の暖簾、白玉などを挙げ、夏祭りや川開きや海水浴を退ける。人が多ければ汗、埃に塗れ、

涼むところではない。

簀戸といえは、思い出す古い映画がある。やや本稿の色合いから逸れるが、昭和二十九年の「ゴジラ」である。あれは真夏の物語。男たちは帽子を被り、スーツは白。東京湾には納涼船が浮かぶ。

戦災に焼け残った屋敷町にある山根恭平博士邸は、和洋折衷ながら、洋室はどうやら主の書斎のみで、他は純和風。主人公らが寛いでいる居間には、障子の代わりに簀戸、引き戸の外には簾、内には扇風機が回りつつ、団扇も併用している。この時代にテレビがあるくらいだから、かなり裕福な筈だが、暑氣払いに關しては一般家庭と変わるところがない。就寝時には多分蚊帳を吊るだろう。台所に冷蔵庫くらいはあるかも知れない。

鏡花作品には、水を感じさせる題名が多い。「夜叉ヶ池」「海神別荘」「龍潭譚」「沼夫人」「池の声」「人魚の祠」「雨ばけ」…。就中、「高野聖」はギリシャ古譚をモチーフにしなが、日本の民話と紹介されても何ら違和感なく、かつ水の匂いに支配された名作だ。水浴びの場面は、エロティックであるが、涼しさがいや勝る。

綾足の『すずみぐさ』には、「木曾の山路を行に、みな月の七日なりける」と始まる箇所がある。「雲が立ち上ったので雷が落ちるかと心配したが、幸い雨だけで済んだ。ただ雨具を着ていなかったのでしたとどに濡れてしまい、しばらく雨宿りをした。山風が吹き、雲が晴れるのを見るうちに時刻も夕方となり、福嶋のうまや（宿場）に泊まった。谷川を見れば、七日余の月影が波の上に乱れていた。」（意訳）

最後に、タイトルが涼しさを呼ぶ作品を思いつく儘に列挙してみよう。（内容は保証の限りでない、念の為）

堀辰雄 「風立ちぬ」

北杜夫 「白きたおやかな峰」

井上靖 「氷壁」

山田美妙 「夏木立」

田中冬二 「軽井沢の氷菓子」

久生十蘭 「氷献上」

鳥取あれこれ その七十二

内田 克彦（地域研究家）

一八九二（明治二五）年七月末の夕方、永井幸次の弟の脩造が外から帰ってきた。幸次は、一八八八（明治二二）年に人に投げられ頭を打って健忘症に陥ったことから、翌年因幡高等小学校を卒業したのち、家にいて畑の仕事、果樹の手入れに、朝から晩まで働いていた。

「日の暮れるまでどこで遊んでいたのか」

「今まで田村虎蔵先生の所で勉強していた。田村先生は因幡高等小学校の先生をやめて、東京音楽学校に勉強のため上京されるそうだ。唱歌やオルガンを勉強する学校だそうだ」

田村虎蔵は、以前から東京の高等師範学校への夢を持っていた。そのため、この年六月、東京音楽学校生徒募集の広告を見た途端、衝撃を覚えた。音楽学校ではあっても、東京に行くことさえできるなら、その夢に一步近づくことができると思っただのである。

「脩造、もう一度田村先生の所へ行って、その学校の規則書を借りて来てくれ」

脩造が借りてきた規則書を持って両親の部屋に入った。

「私も行かせて下さいませんか」

父の脩は煩悶の様子であったが、母は励ましてくれた。

翌朝の新聞を見ると、村岡範為（東京音楽学校校長）が帰省した、との記事が出ていた。「音楽事情の視察」とは名目で、志願者の勧誘が目的であった。

村岡は、脩が藩校尚徳館のときの教え子であった。

「今夜、宿を訪ね、学校の様子を聞いてこよう」

脩は幸次を連れて、村岡の所に出向いた。暫く昔話をした後、本題に入った。

「息子の幸次が音楽学校に入学したいと希望している」と村岡に話すと、村岡は答えた。

「ともかく入学試験を受けさせて下さい」

永井幸次は八月二一日に、受験のため上京することになった。脩造は「兄さん、安心して出発して下さい。兄さんの仕事は引き受けましたから」と言ってくれた。

九月一日の受験日、点呼が済んだから、田村虎蔵に挨拶に行った。

「クニでは始終弟がお世話になりました。拝借した規則書を見て私も是非入学したいと思い、両親も漸く許してくれました」

「脩造君からその話を聞き、愈々出られることになったと聞いて、僕もうれしく思いました」

田村は特撰生で入学、翌年専修部二年に編入、一八九五（明治二八）年七月に卒業している。幸次は予科に入学、翌年専修部に進学、一八九六（明治二九）年七月に卒業している。

永井幸次は、一五歳のとき、ローランド宣教師に就いて音楽を習い始めた。脩造の友達に、音楽が好きな岡野貞一がいた。岡野を連れ、投網船一艘を借りて港口に出て、二人で声の練習をした。

後に、幸次が音楽学校の三年生であったとき、当時岡山の姉のもとに居た岡野貞一を呼び出して、東京音楽学校に入学させ、卒業後研究生に残ることを勧めている。

以上のことから、現在わらべ館で特別に顕彰展示されている、鳥取出身の三人の音楽家を結びつけたキーマンは、永井幸次の弟の脩造、ということになる。

田村は一八七三（明治六）年五月生まれ、幸次は一八七四（明治七）年二月生まれ、岡野は一八七八（明治一一）年二月生まれである。永井脩造は、明治三七年に二七歳で亡くなっているため、一八七七（明治一〇）年生まれだとする

と、岡野とは同学年になるのであろうか。

先にも触れたが、脩造は田村が鳥取師範学校の教生として附属小学校に教えに来たときに出会っていた。一方、岡野は吉方学校を経て三郡高等小学校に通っていたので、学校での接点がない。永井家は西町にあり、岡野家は吉方から貞一が一〇歳のとき西町に転居しているため、近所になる。因みに、『鳥取教会百年史口』の受洗者名簿を見ると、一八九二（明治二五）年九月二五日の条に、岡野と脩造の名前が挙がっており、鳥取教会で知り合ったのだらうか。

脩造は、一八九四（明治二七）年に二〇歳の徴兵検査を受けて入営し、三年間の看護卒（兵）の後、政治家を目指して早稲田の校外生の課程を修了し、上京して三年編入試験に合格し翌年卒業、神戸の火災保険会社支店に勤務後まもなく日露戦争に招集され、満州で病没した。

なお、永井家の墓は、立川共同墓地にある。一方、岡野家の墓は観音院にある。また、護国神社に大きな「彰忠碑」が建っており、裏には、「日露役戦死病没者英名」として筆頭に「陸軍歩兵中佐 須知源次郎」の名をはじめ数多くの名前が載る中に、「陸軍三等看護長 勲七等 永井修造」とある。

八代日記

(二十九)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

七月某日

東京にてライブ。バンド、「現代の山火事」のレコード発売ライブにお呼ばれした。会場に着いたら山火事がリハール中だったのだがものすごく音がやかかった。ロックやなくとウキウキしてしまう。しかし爆音にはすぐ耳がやられて自分の演奏ができなくなってしまうので直撃しないように楽屋に避難。順番を待つて自分らのリハも終える。順調であった。

今日は主催の山火事のシンムラさんと我々でDJもする予定で、7インチを30枚ほど用意してきた。良い音でレコードが聴けるのがうれしくてソワソワしてしまう。ウキウキとかソワソワとか子どもみたいで恥ずかしいのだけれど、サラリーマン生活中はほぼ忘れてしまっている感覚で、

たまに思い出しとかないと多分いつきに老け込みそう。

出番は3バンドのうちで1番目。山火事のリハの爆音につられて音が大きめだったかもしれない。まあ普段も割とうるさい方ではあるのだが。出番が最初だとあとはパーティーを楽しむだけ。次のシャイガンティ、DJ、山火事、DJと聴いて聴いて飲んで踊った。

ラスト、終電も近づいたのでメンバーのうちに泊めてもらおうと思っていたが、今日は彼女がくるから来ないで、と言われる。熊本から来てその仕打ち？ 鬼！ 薄情者！と罵っていたら山火事のリーダーが泊めてくれるという。ありがとうございます。

リーダーの部屋はとても綺麗で洒落てて、あまつさえなんだか良いにおいもしていて、映画の話をたくさんしながら眠りについた。この感じ懐かしいなあ。(イベント中、マスクはちゃんと付けており、こまめに手指の消毒もしていました。)

七月某日

映画の話が楽しくて、何か映画を見たいけど出歩く余裕はないので、古書店からホウ・シャオシェンの『悲情城市』と『戲夢人生』のパンフレットを取り寄せた。充実の中身。読み終えるとぐったりするほどの情報量。こういうパン

フレットはもう作れないのではないかと思われる。

七月某日

バルサがやたらと補強をしているが、今後数年とか数十年の放送権の売却で資金をゲットしているとのことらしい。そんな裏技使った前借りみたいなことができるものなんだ。バルサにはぜひ復活してほしいけれど、財務は健全にいきたいものです。しかしフォワード多いよなー。レバンドフスキとオーバメヤンとファティってどうやって併用するのかしら。オーバメヤンとファティは左もいけるのだったっけかな。デパイはどうするのか。

他チームも今季は大物の移籍が多かったような印象。次のシーズンも楽しみだ。

七月某日

土曜に時間ができて久しぶりに古書店に行けた。店主と少しお話。1時間ばかり滞在したが、結局レコードばかりじっくり見てしまった。レコード欲が久しぶりに高まっている。よって、数年行かないようにしていた熊本のレコード屋に行ってしまった。行ってしまったが、時間切れが迫っていたのでそこまで散財せずに済んだ。が、気になるレコードを買わずに残してきてしまったのできつと近いうちに私

はそこへ行くであろう。乱世に金が値上がりするように、なんだか無性にレコードを所有したい。ただのストレスかも知れないけれど。

七月某日

あつという間にひと月が過ぎてしまつて、こないだ原稿を提出したはずなのにもう締切が近づいているが、先月何を書いたのかは全然思い出せず、遠い昔のようでもある。梅雨明けの後の雨つづきで、暑くはあるのだけど七月後半であるという感覚が薄い。休みが明けて明日からまた仕事だ。弊社には夏休みがない。夏バテしないようにぼちぼちがんばつていこう。

夏至の明るひ宵の口に…

秦阜 梅林

(楽人)

かのシェイクスピアの傑作喜劇、其の舞台に寄せたメンデルスゾーン・バルトルディの劇附随音楽は早くから「古典」の仲間入りを果たしてゐる…中でも華やかで格調高く優美な「結婚行進曲」は今日式典セレモニーで「定番中の定番」となり、世界中「音楽を知らない人にも歌へるクラシック」として知らなひ人を探すのにも苦労してゐる程。トラムベットのタタタターンと云ふ冒頭のファンファールを聴き、ああこの作品中のナンバーなんだと驚かれる向きも少なくなひだらう。

一

後半に設へられた其れヲ別格として、此の曲集にはヴァグナーをして「音の水彩画家」と称へられたメンデルスゾーン^Ⅱのイメージ力、色彩力、素養と管弦楽法の熟達ぶり

も相まり「見てきたかのやうな」世界が鮮やかに広がり…聴く者をお伽噺の世界に誘つて呉れる…白眉はスケルツォ・彼は抑、此の分野ではベートーフェン以来の達人、無類の強みを發揮するのだが中でも此の軽快なスケルツォは洗練を極めた傑作、妖精達を囁かせ自在に躍らせる為、自家薬籠中、秘伝の魔法をたつぷりかけたもの。そして前後して了つたが遡つて…先ず…

二

序曲「昔々或るところに…」と…如何にも爽やかな語り口は彼一流。呪文の如きハツつの和音に続いて大交響曲でも始まるのかしら?と思はせる堂々たるこの門構へはだうだらう!劇場で幕の上る前、ハイお約束事はかうですよと許り観客を夢の国に案内して呉れる、此のワクワク感が堪らなひ。大上段に構へた正統派の序曲に知らず知らず…無邪気なメルヒェンの世界に脚を引き摺り込まれ、気がつけば周りは一面セット…夢の中の私達はどつぷりフィクションの國の住人になつてゐるではなひか…恐るべきは大ゲイテも称賛した早熟の天才。全体の劇音楽に先立つて書かれたこの序曲(※参照)、年齢かこの作品鮮やかな手並みの彼をして晩年、物語の全編を完結させやうと!堅く決心させたのだらうか…?「いつの日にか」と。

三

更に愁ひを帯びた間奏曲は―常に軽快な、澁むことの無い
…流れの速さ、めまぐるしさが心地よく、どこまでも典雅
な作曲家の手際が、聴く者全ての「俗っぽさ」を流し落と
して呉れるやう!

そして帳の降りた夜も更けて聴く夜想曲。ブラスの重厚
なハーモニーはフィナーレを暗示しつつ独奏ホルンが辺り
を平和に飴してゆく…魔法にかけられた恋人達は皆眠りに
落ち、見守る月が金色に煌き…風は? と…観客(聴衆)
に楽の悦びだけで想像力を逞しくさせて呉れる…此の他「斑
模様の蛇」等…此れ程劇場向きの楽曲が他にあらうか! 読
書好きの諸兄姉を、それぞれに名演出家たらしめる不滅の
名曲此処に在り! ではある。

2022. 07. 07

「今回の一冊」 W.シェイクスピア「夏の夜の夢」①
小田島雄志訳シェイクスピア全集白水Uブックス刊②松岡
和子訳筑摩文庫刊③福田恒存訳新潮文庫刊

「今回のディスク」 F.メンデルスゾーン「バルトルディ
劇付随音楽「夏の夜の夢」Op.61 (1826※序曲Op.21のみ) 42
全曲版) ①A.プレヴィン指揮ヴィナー・フィルハーモニ
カー (rec 1985) ②E.オーマンディ指揮フィラデルフィ
ア管弦楽団 (rec 1976. 4~5月) ③O.クレムペラー指揮フィ

ルハーモニア管弦楽団・J. ベイカーMs 他 (rec 1960) ④
G.セル指揮クリーヴランド管弦楽団 (rec 1957) ⑤P.デ
ルヴォー指揮ハムブルク国立フィルハーモニー管弦楽団
(rec 60s)



現実から逃れる場所へ

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

鳥取の中で私が月一で通っているエリアがある。

湯梨浜町にある東郷池周辺だ。

そこに通うようになったきっかけは、jig theaterという映画館のおかげである。この小さな映画館ができて、一年を迎えた。

車を持つ前、何度か松崎まで汽車に乗って行こうかと考えたけれど、やめてしまっていた。鳥取に来て半年経って、車を持つようになったものの、米子まで映画を観に行く気にはならなかった。ほぼ初心者だった私にとって一時間半以上のドライブを往復するのは、自信が持てなかったからだ。

自分は東京にいた頃、商業映画以外も少しずつみるようになっていた。大学で交換留学した際に、映画論の授業を

とっていたおかげで、「私が知っていた映画はほんの一部なのだ」と身に染みたからだ。渋谷のユークススペースなど、気になる映画がかかっているタイミングを確認して出かけるような人になった。

芸能事務所で働き始めてから、日本の商業映画を中心に、「勉強」のために観るようになった。ただ、当時はいつ会社から携帯電話に連絡が来るかわからず、落ち着いて楽しいめないまま、正直記憶に残っていない。

他人があまり観ない映画を観る私は、少々鼻持ちならない奴なのかもしれない。が、昔「僕は映画好きなんだ」と言われて、好きな監督もいなかった人には辟易してしまっただ。それ、映画好きって言わないよ、私も好きな監督いるわけじゃないから、映画好きって言わないのにと。

ということ、あまりにも雪がひどい時期以外は、ここで映画がかかるタイミングで、湯梨浜までひとりでドライブするのが私の楽しみの一つになっている。

東郷池の近くにある書店・汽水空港のモリテツヤさんが、jig theaterの運営日はバブルのようにお客さんが来るとおっしゃっていたのだが、自分もその一人である。

前々から何度か行こうと思っていたのだが、目的が二つあると「ついでに」と行きやすい。映画を観た後に本屋あるいは観る前に本屋、時にはカフェに行ったり、東郷池の周りを少し歩いたり。そうすると、鳥取市内の見慣れた風景とは違う東郷池を囲む世界で、ゆったり落ち着くことができる。

汽水空港は「世界に幅とゆらぎあれ」、jig theaterは「戸惑い」を案内」とそれぞれ掲げている。

一周年に上映された『コール・ヒストリー』はまさにそんな作品で、福島風景の映像に朗読を通して物語が進む。〈声〉と呼ばれる都市伝説をめぐる三人の物語で、その〈声〉を収集する「彼」に協力した「私」と、作品を制作する「美術家」の視点から語られる。誰の語りなのか、この映像にはどんな意味があるのか、「戸惑い」が続いていく。一人称の視点カメラのように作品は見えるが、私自身がその人の視点に気持ちよく立つことはない。その人の視点に立てば、その人の心の中身まで知れると思うのは幻想なのではないかと思いつつ、映画を観ることになる。

「現実では、思考そのものが生のまま残ることはない。つまり、創造なしに、思考は現実において生き長らえない。

創造という伝達装置によって、初めて思考は他者に伝わっていくのだ。」（坂口恭平『現実脱出論』）

『現実脱出論』の中で、「現実さん」が唯一無二であるように圧倒的に人々を支配するようになっていくが、現実も一つの生命体にすぎないと坂口氏は語る。そんな「現実」において、それぞれの思考、個々人の知覚的空間は、「創造」という伝達装置を通して、「現実」に存在でき、他者に伝わるようになる。

『コール・ヒストリー』の作品の中でも扱われるのは、そんな「創造」に対する葛藤や努力だ。形にすることで他者に伝わる。しかし、「美術家」に作品化された時に起きた「私」が感じる怒りは、もしかすると自分が信じていた「現実」が違ふと気付かされるからだろうか。

この東郷池のほとりに出かけることは、今の私にとっては現実との距離を置くのにちょうどいい場所だ。おそらく私はこの場所に少し馴染めない感覚のまま通い続けることになると思う。

生きていける。他人のまま、さまよえる場所があれば。

旅

あきの素生

(くうねるめがね)



旅に出たい。遠くでなくてもいい。行ったことのない町で、観光しながらその土地のおいしいものを食べ歩く。しょっちゅう出かけるわけでなく、年に一、二度、何かの折にさきやかな旅行をするくらいだったのだが、何だかすっかり旅から遠ざかってしまった。

子どもの頃、アジアの世界遺産を紹介するシリーズものの本が家にあり、それを見るのが好きだった。バーミヤンの石仏、アンコール・ワット、インドの石窟寺院が、とりわけ印象に残っている。子ども向けの本ではなかったのですが、文章はよくわからなかったが、写真が多く、眺めているだけで満足だった。何に惹かれたのか、繰り返し繰り返しその本を開いて、大きくなったら、きっと実物を見に行くのだ、と思った。が、残念ながら、どれひとつ訪ねることのないまま今に至る。旅行に行くことのハードルがぐんと高くなってから、そういえば、と思い出したのだ。忘れてし

まっていたけれど、子どもの頃の「大きくなったら」は、絶対そうなるに決まってるし、ただ今は子どもなだけ、あとは大きくなるだけ、みたいな確信めいたものが詰まっています、大人になることが待ち遠しかった。

今や名だたる観光名所はインターネットで、静止画のみならず動画でも見る事ができる。GoogleEarthでタージ・マハルやギザのピラミッドに降り立つことだってできる。もちろん、実際にその場に立つこととは比べべくもないだろうが、少しでも好奇心を満たすことができる。件の本は、カラー写真もありつつ、メインは白黒写真で、だからこそ実物を見たいという気持ちを掻き立てられた。当時このような環境があったなら、あの焦がれるような気持ちは持たなかったかもしれない。

振り返ってみれば大きくなってからの旅行は、行けるときに行けるところに行く、という具合に、総じて場当たり的なものが多い。旅をすること自体が目的ともいえる。目玉といえる観光名所があるときでも、目指す場所に着き、自分がここに来た、と感じたところでそれは完結して、旅の記憶として残っているのは、そこに至るまでのあれやこれやだったり、なんてことのないやりとりだったりすることも多いよね、と想ったりもする。

二十歳になるかならないかの頃、青春18切符で旅に出た。九州に行く、ということ以外予定を立てず、宿も取らずに、友人と二人列車に乗った。バックパッカーへのあこがれと自由になる時間があつた。荷物は最低限にしようと言っていたが、小心者の私は時刻表を準備していった。それを見越した友人はガイドブックを。あの二冊がなければ、旅は失敗に終わっていただろう。福岡で何とか宿を探し、屋台で博多ラーメンを食べたあと、次の日の行先を話し合い、阿蘇に行くことに決めた。阿蘇に着くのは、翌日の夜になるようだった。

鈍行で行く。過すのはほとんど列車の中だ。それでも見慣れない広々とした平野、南に行くほど濃くなっていくような緑、車窓から見える初めて訪れた土地の風景に、気分は高揚した。とりとめもなく話し、たまに持参した本を読んだ。そうこうしているうちに、列車は山を登り始めたらしい。何の予備知識も持たなかったので、本から顔を上げたとき、見晴らしがよくなっていることに驚いた。列車はゆっくりと進み、方向を変えて、また少しずつ高度を上げていく。スイッチバックというのだと、後で調べて知った。ちょうど日が暮れる頃合い、眼下に広がる景色が、桃色から薄紫色に変わっていく。あるとき、もしスマホがあつ

たなら、動画を撮影したかもしれない。でも、持っているものと言えばガラケーと使い捨てカメラ、様々な瞬間を気軽に記録に残す習慣にまだなじみのなかった頃のこと、ただただこの光景を見逃すまいと目を凝らしていたのを覚えてる。

そのあと長崎に行き、船で沖縄まで行くか、と息巻いていたが、台風が来てもくろみは夢と消えた。十時間以上かけて地元に戻り、友人と駅で別れて、一日分の切符が残った。思い出深い夏の旅である。

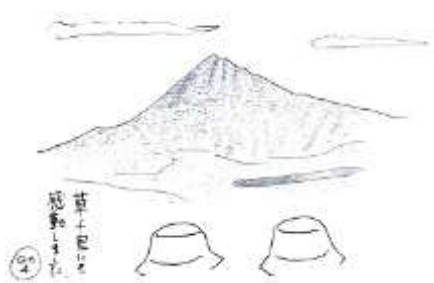


イラスト あきの素生

マメイヌのいえ



ドラメリア

(座敷わらし)

子ども達の登校する姿を目にしなくなつて、市内の大半の学校が夏休みに入ったことを実感する。「大半の」と書いたのは勤務校は七月末近くまで授業があるためで、これは県内でも一、二を争う遅さだ。ああ早く夏休みにならないものかと切望するが、周りに聞いてみると今の小学生は宿題が多くて大変らしい。

小学生の頃、夏休みになると実家の近所にある別の家に勉強に行くのが恒例だった。そこは祖母が手入れを任されていた空き家で、林のそばに建つ木造の一軒家は風が通つてひんやり涼しく、冷房なしでも過ごせた。それに本やテレビなど誘惑も少なかったので、宿題に取り組むには絶好の環境だったからだ。

この夏の家をわたしはひそかに「マメイヌのいえ」と呼んでいた。当時佐藤さとする作『コロボックル物語』の虜になつており、特にシリーズ二作目『豆つぶほどの小さいぬ』に登場する伝説上の生き物“メイヌ”の存在を信じている子どもだった。実家は吹き抜けのある洋風住宅で見

込みがなさそうだったが、ここならきつと棲みついているのでは、と目を付けて、古い家の中をあちこち探索して回っていたものだ。あるときは薄暗い屋根裏まで限なく探索し、あるときは手製のワナを設置し(残念ながら好物である肝油は入手できず)、またあるときは敏捷な姿を捉えるために視力の訓練、と日々励んだものの残念ながらマメイヌは発見できなかった。でも、大人の期待に反して、滞在時間とやる気の大半を勉強ではなくマメイヌ探しに費やしたので、やはりあの家は「マメイヌのいえ」と呼ぶにふさわしかったと思っている。

なお、夏休みの宿題は最終日の夜に全力で片づける羽目になつており、これもまた夏の恒例。



・編集後記:

指は緑にはなっていないませんが、職場の鉢植え達はきとうな水やりにも挿し木にも負けず、すくすく育っています。植物の生命力ってすごいものです

ドラメリア(編集長)

推し本。山本志朗『目的なき人生を生きる』角川新書。久しく品切が続いてましたが、ようやく重版出来。推し文「幸福な死に方をしなければ、幸福な生き方をしたことはないのか？」スコラ哲学へと誘います。

奈良敏行(発行人)